

新たな世はAI発達社会への備えの年に

年始の新聞・テレビの報道や番組はAI一色でした。AIの発達でわれわれの経済や社会、働き方がどう変わるのか、おおむね新年の年明けにふさわしく明るいトーンの報道が目立ちました。われわれを日々の勤勞から解放し、趣味やボランティアに打ち込むことができるバラ色の未来をもたらしてくれる、という見方です。

しかし、今話題になっているユダヤ人学者ハラリ氏の「ホモ・デウス」(河出書房新社)を読むと、一変して重苦しい気持ちにさせられます。

ハラリ氏は、AIの発達した世界を考へる際に重要なキーワードは、「アルゴリズム」だといいます。「アルゴリズム」というのは、「計算をし、問題を解決し、決定に至るために利用できる、一連の秩序だったステップ」と定義され、計算をする際に従う方法のことです。私たちの感覚や欲望は精緻なアルゴリズムによって行われているので、「AIが発達すれば、自分より自分のことをよく知るアルゴリズム

ムに自分が支配されるようになる。そのような社会では、アップグレードされた少数の特権エリート階級と、残りの大部分の彼らに支配された劣等カーストに分かれ、自由主義の基盤が崩壊し、大衆の時代が終焉、果てしない格差社会が出現する」と予言します。

そして「人間はアルゴリズムに支配されたデータに代わっていき、土塊のように流されていく存在になる」可能性を示唆しつつ、今から「人間とは何か」を問い、「自ら満足する方法を見つけ出すことが必要だ」と説いています。

すでに中国では、アリババグループの芝麻信用が、個人ごとに支払履歴や交友関係、どこで食事や買い物をしたか、交通違反をしたことがあるかどうかなど日々の行動をデータ化しており、それをAIで点数化して、信用度として与信審査などに活用しています。個人が、その点数によって交友関係を選別するという動きが始まっているといえます。自分の点数より低い友人との交流は制限すると

いうわけです。

このような現実を目の当たりにすると、このまま市場メカニズムのもとでAIの発達を放置しておくと、AIを使いこなす人とそうでない人との計り知れなく大きな格差社会はすぐにでもやって来るような予感がします。そんな事態を招かないためにも、二つのことが重要だと考えています。

一つは、格差社会が到来しないようあらかじめの対策を打っておくことです。そのために国家しかできない税制改革の見取り図を描くことが必要です。余裕のある者からより多くの負担を、そうでない者の負担は軽くということと格差拡大を防いでいくのです。このことは「高齢化で高騰する社会保障費を賄うための消費増税」とは異なるということに留意する必要があります。このような税制改革は、徴税権のある国家しかできない政策と言えましょう。

もう一つ重要なことは、AIの発達に対応できるような教育を行っていくことです。そのために

は財源が必要で、ここでも負担の問題が議論となります。もうすぐ小学生からプログラミング教育が始まるそうですが、AI時代に必要となる教育というのは、そのような技術的な面だけでなく、人間の本質を考え、行動を規律する倫理などを考えることではないでしょうか。

幸いAIは、知能や知識は人間より優れていても、意識はありません。わかりやすく言えば、「AIは恋愛しない」ということです。しかしいずれそのような社会(シンギュラリティ)が来るという学者も多くいます。

AIの発達により大きな変化がやって来ることはほぼ確実です。少子化でも、高齢化社会でもそうでしたが、わかっていながら、その時にならなければ具体策が出ないというのが現実の姿です。これから始まる新たな世は、国民も政治も感性や想像力を働かせて、AI発達社会がデストピアにならないようあらかじめの対策を考えるスタートの年にしたいものです。